

青森の子 世界のムナカタ  
棟方志功を学ぶ  
指導資料集



棟方志功  
没後 50年記念展

Munakata Shiko  
50th Year Posthumous Commemorative Exhibition  
青森の子 世界のムナカタ

## ■ 発刊の言葉

青森市の初代名誉市民であり、世界的な芸術家・棟方志功は、1975年にその生涯を閉じました。2025年は棟方志功没後50年を迎える特別な年です。この機会に、棟方志功の業績と作品の魅力を再評価し、次世代に伝えていくことが重要です。

青森市は、棟方志功や関野準一郎をはじめ、数多くの優れた版画家を輩出しており、「版画のまち」として知られています。市内の小学校では、すべての学年で版画を取り入れた授業が行われており、これは全国的にも珍しい取組です。その成果として、約50年にわたる「青森市小・中学校版画集はまなす」の刊行や、「棟方志功賞版画展」の継続があり、多くの子どもたちが創造性を育てています。

本冊子『棟方志功を学ぶ「青森の子 世界のムナカタ」指導資料集』は、小・中学校の先生方が棟方志功の功績や作品の魅力を児童生徒に伝えるための指導用資料です。授業の活動を示した指導案のほか、すぐに使用できるワークシートで構成されており、郷土の文化芸術の継承と発展を目的として発刊するものです。

画家になることを夢見て挑戦し続けた棟方志功のように、青森の子どもたちが次代を創造する担い手として、大きな夢と志をもち、その実現に向けて歩いていけるよう、本冊子が活用されることを切に願います。

最後になりますが、本冊子の作成にあたり、多大なご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げます、発刊の言葉といたします。

令和7年7月

棟方志功没後50年記念展実行委員会 名誉会長  
青森市長 西 秀記

- 1 発刊の言葉
- 2 目次
- 3 「わだばゴッホになる 棟方志功」  
『魅力発見！青森学 -中学生版-』抜粋
- 5 棟方志功略年譜
- 6 学習指導案  
作品をみて話し合おう①（小学校3・4年生）鑑賞
- 7 学習指導案  
作品をみて話し合おう②（小学校5・6年生）鑑賞
- 8 学習指導案  
裏彩色を体験しよう（小学校3年生以上）
- 9 学習指導案  
裏彩色による表現（中学生）
- 10 学習指導案  
生き方を知る わだばゴッホになる（中学生）  
道徳科・総合的な学習の時間・美術科
- 11 ワークシート  
作品をみて話し合おう①
- 12 ワークシート  
作品をみて話し合おう②
- 13 ワークシート  
裏彩色を体験しよう
- 14 ワークシート  
メガネをつくってみよう

棟方志功を学ぶ  
「青森の子 世界のムナカタ」  
指導資料集

# わだばゴッホになる 棟方志功

## (1) 青森市が生んだ世界的な板画家

棟方志功は、1903年(明治36年)、青森市大町(現在の安方二丁目)の鍛冶屋に、15人兄弟の三男として生まれました。少年の頃から、風絵やねぶた絵にひかれ、絵を描いていましたが、あるとき絵の先輩からゴッホの「ひまわり」を見せられ、この絵に感激した志功は「ようし、日本のゴッホになる」(『板極道』)と叫んだそうです。

そして、努力の末、独自の画風を創り上げていくのです。



## (2) おもだかの花 -幼少年時代-

棟方家は刃物鍛冶屋で、屋号を「藤屋」、のちに「富士幸」と名乗りました。子どもの頃の志功は、よく面倒を見てくれた祖母へ、ふりがなを頼りに、毎日お経を読んであげるといふ、やさしい子どもでした。また、水辺に咲くおもだかの花をこよなく愛し、その美しさを表せる人間になりたいと思っていたそうです。

そんな志功は長島尋常小学校を卒業すると、すぐ家業の鍛冶屋の仕事を手伝うこととなりますが、ねぶた絵描きの手伝いにも夢中でした。

1920年(大正9年)、志功は青森地方裁判所の弁護士控所の給仕になりました。夏には4時半頃に起きて裁判所に出かけ、掃除を大急ぎで済ませると、写生帳を持って合浦公園に出かけました。描き出す前に、必ず風景に向かっ

て一礼し、描き終わるとその風景に向かって「ありがとうございました。」とお礼を言いました。

ある日、スケッチする志功と散歩する洋画家小野忠明とが出会いました。志功は小野とさまざまな画家について語り合いました。特にゴッホの話に夢中になりました。小野は志功に雑誌『白樺』の口絵に載っていたゴッホの「ひまわり」の絵を見せました。赤の線の入った、黄色にきらきらと光るひまわりが六輪、背景には、目が覚めるようなエメラルドの空が広がっていました。「何ということだ、絵とは何とすばらしいものだ、これがゴッホか、ゴッホというものか！」(『わだばゴッホになる』)志功はただただ感動し、震えるような喜びの気持ちでいっぱいになりました。それからというもの、志功は毎日絵を描きました。気に入ったところを見つけては描きました。

## (3) わだばゴッホになる -帝展への道-

1924年(大正13年)、「日本のゴッホ」を目指す21歳の志功は、東京に出て、さらに絵の勉強をしたいと考え、父の幸吉に話して許しをもらうことができました。「その代わり、帝展に入選する偉い絵描きになって帰って来い。」(『わだばゴッホになる』)と父は言いました。「帝展に入選しなければ帰りません。誰が病気をしても、死んでも帰ってまいりません。家の方に不幸があっても知らせないでください。」(『板極道』)そんな言葉を残して、東京に向かったのです。志功は紹介状を持って洋画家の中村不折のもとを訪ねますが、門前払いを受けてしまいました。あては外れましたが、働きながら絵を学ぶことにしました。貧乏生活に耐えながら暮らしていくためには、納豆売りや靴直し、映画館の仕事など、何でもやらなければなりません。しかし、絵の勉強だけは決して怠けることなく、仲間がトランプ遊びや無駄話をしている時も、せっせとスケッチをするのでした。

それにもかかわらず、「日本のゴッホ」の前途には、厳しいものがありました。同郷の画



にぼさつしゃかじゅうだいし  
二菩薩釈迦十大弟子 1939/1948改刻(1967摺) 木版・紙 各101.5×38.0cm 棟方志功記念館蔵

家橋本花からは「デッサンというモノが無い」(『板極道』)と言われました。帝展には4回連続落選でした。自分の才能に対する悲観が最も深かったのがこの頃です。そのうち、父が亡くなりました。誓いだから帰れない。志功は心のなかで泣き続けました。心の底からやるせない悔恨の思いが噴き出しました。しかし、師匠をとれと強く勧めた兄に対して、師匠をとると師匠以上になれないと断り、自分で決めた道を、あくまでも直進しました。この志功の決意は、津軽人特有の「じょっぱり」からきたものであり、それはまた厳しい鍛冶職人であった父の手伝いをするうちに、身に付いたものでした。

#### (4)「世界のムナカタ」へ

1928年(昭和3年)、志功25歳の秋です。またまた帝展の時期がやってきました。志功の出品した作品の裏には郷里の善知鳥神社の御札が封じ込めてありました。いよいよ、上野の美術館での発表です。『雑園』、ムナカタ・シコウ(『板極道』)と呼ばれた瞬間、彼はへたへたとその場に座り込んでしまいました。何とも気が遠くなるような思いだったのです。そして、長年にわたる悲願を達成した志功は、入選の感激にむせびながら、心の中でいつまでも父母の名を呼び続けるのでした。ついに、待ちわびた帰郷の時が来ました。志功は先祖の墓に抱きついて、「至らぬ不幸ものでした」(『わだばゴッホになる』)とわびたそうです。

やがて油絵の在り方に疑問を持ち始めた志功は、板画家として歩み始めました。版画こそが、日本人の心を最も生かした芸術ではないだろうか。その証拠に、あのゴッホでさえ、

日本の版画から多くのものを学んだのではないかと考えるようになりました。それからというもの、志功は、ただ一筋に、版画の世界へまっしぐらに突き進むのでした。むろん版画の世界でも、生涯師をとらず、私だけで始まる世界を持ちたいと心に刻みました。武者小路実篤の「この道よりわれを生かす道なし、この道を歩く」(『板極道』)を心のことばとしました。

そして、ついに、1955年(昭和30年)サンパウロ・ビエンナーレで版画部門最高賞を受賞、1956年(昭和31年)、ヴェニス・ビエンナーレで国際版画大賞を受賞し、ここに「世界のムナカタ」が誕生したのです。志功はゴッホにはなれませんでした、が、「世界のムナカタ」になったのです。

1970年(昭和45年)11月3日、青森県人として初の「文化勲章」を受章した志功は、子どものように喜びながら、周囲の人々にこう語ったそうです。「芸術の中でも、日本の伝統を引き継いでいる版画に与えてくれたのがうれしくって。大きな花をもらったようですね。『棟方よ、今後もしっかりせい』って、大きな号令を受けたような気がします。」

生涯にわたって、青森を愛し、ねぶたを愛した、偉大な芸術家棟方志功は、1975年(昭和50年)、72歳でその生涯を閉じました。

『魅力発見！青森学 -中学生版-』  
発行・青森市教育委員会 より 抜粋  
(一部修正)

# 棟方志功 略年譜

1903年	明治36年	0歳	9月5日、青森市大字大町1番戸(現・青森市安方)に生まれる。
1916年	大正 5年	13歳	3月、 <b>青森市立長島尋常小学校を卒業</b> 、家業の鍛冶屋を手伝う。
1920年	大正 9年	17歳	弁護士・沢地甚蔵の紹介で青森地方裁判所の弁護士控所給仕となる。 10月25日、母さだ死去。享年41。
1921年	大正10年	18歳	<b>青森市在住の洋画家・小野忠明に雑誌『白樺』に掲載されたゴッホのひまわりの原色版を見せられて感銘を受け、油絵を描き始める。</b> 松木満史らと洋画の会「青光画社」を結成。
1922年	大正11年	19歳	青光画社第1回展開催。以後、昭和4年の第13回展まで開催される。
1924年	大正13年	21歳	<b>志を立て上京</b> 。初めて帝展に《合浦池畔》を出品するが落選。
1925年	大正14年	22歳	10月26日、父幸吉死去。享年55。
1926年	大正15年	23歳	第5回国画創作協会展に出品された川上澄生の版画《初夏の風》を見て心を動かされる。
1928年	昭和 3年	25歳	<b>第9回帝展に油絵《雑園》で初入選し5年ぶりに帰郷、両親の墓前に報告する。</b>
1930年	昭和 5年	27歳	第5回国画会展に《貴女行路》など版画4点を出品し初入選。 青森市の善知鳥神社にて赤城子ヤと結婚を誓う。
1931年	昭和 6年	28歳	初の版画集『星座の花嫁』刊行。
1932年	昭和 7年	29歳	第7回国画会展に版画4点を出品し《亀田・長谷川邸の裏庭》で国画奨学賞を受賞。同作と他2点がボストン美術館、もう1点がパリのリュクスサンプル美術館に買い上げられる。 <b>版画家として立つ決意を固める。</b>
1934年	昭和 9年	31歳	中野区沼袋南180番地の借家に移り、妻子ヤと2人の子を迎える。この家を「雑華堂」と名付ける。
1936年	昭和11年	33歳	<b>第11回国画会展に版画《瓊瑤譜・大和し美し版画巻》を出品し、日本民藝館に買い上げられる。これを契機に柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司らの知遇を得る。</b>
1938年	昭和13年	35歳	<b>第2回新文展に《勝鬘譜・善知鳥版画曼荼羅》を出品し、版画では官展初の特選となる。</b>
1940年	昭和15年	37歳	第15回国画会展に前年制作の《呵呷譜・二菩薩釈迦十大弟子版画屏風》を出品。翌年佐分賞を受賞。
1942年	昭和17年	39歳	初の随筆集『板散華』後記において、 <b>自らの版画を「版画」とよぶことを宣言。</b>
1945年	昭和20年	42歳	富山県西砺波郡福光町(現・南砺市)に疎開。 東京大空襲で代々木山谷の住居を焼失し、板木のほとんどを失う。
1951年	昭和26年	48歳	約6年8か月を過ごした富山県福光町から東京都杉並区荻窪に転居。
1952年	昭和27年	49歳	<b>スイス・ルガノで開催された第2回国際版画展に《女人観世音版画巻》を出品し、銅版画家・駒井哲郎とともに日本人として初の優秀賞を受賞。</b> ニューヨークのウィラード・ギャラリーで初の海外個展を開催。
1955年	昭和30年	52歳	<b>第3回サンパウロ・ビエンナーレに《二菩薩釈迦十大弟子》《湧然する女者達々》などを出品し、版画部門最高賞を受賞。</b>
1956年	昭和31年	53歳	<b>第28回ヴェネツィア・ビエンナーレに《二菩薩釈迦十大弟子》《柳緑花紅頰》などを出品し、国際版画大賞を受賞。</b>
1957年	昭和32年	54歳	鎌倉市津(鎌倉山)に土地付きの家を入手。アトリエを「雑華山房」と名付ける。
1959年	昭和34年	56歳	ロックフェラー財団とジャパン・ソサエティの招待で初渡米。 各地の大学で版画の講義を行い、ニューヨーク、ボストンで個展を開催。 ニューヨークに棟方ギャラリーが開設される。 夏、ヨーロッパへ約1か月間旅行し、この時 <b>ゴッホの墓を訪れる。</b>
1960年	昭和35年	57歳	クリーブランド美術館で棟方志功展が開催される。(その後、シカゴ、シアトル、ロサンゼルスなどを巡回)青森県褒賞を受賞。 眼疾がすすみ、 <b>左眼をほとんど失明。</b>
1961年	昭和36年	58歳	心の師と仰いだ柳宗悦逝去。享年72。 京都市嵯峨の法輪寺から法橋位を叙位される。
1962年	昭和37年	59歳	富山県真言密宗大本山日石寺より法眼位を叙位される。京都市嵯峨の法輪寺からも法眼位を再叙位される。
1965年	昭和40年	62歳	セントルイスのワシントン大学及びジャパン・ソサエティの招待で2度目の渡米。
1967年	昭和42年	64歳	個展開催のため3度目の渡米。
1969年	昭和44年	66歳	<b>青森市名誉市民(第1号)の称号を贈られる。</b>
1970年	昭和45年	67歳	<b>文化勲章を授与される。また、文化功勞者に顕彰される。</b>
1972年	昭和47年	69歳	詩人の草野心平とともにインドを旅行する。
1973年	昭和48年	70歳	文部省から「財団法人棟方版画館」設立の認可がおりる。
1974年	昭和49年	71歳	7月、「志功」を「志昂」と改名する。 <b>青森へ帰郷し、三内霊園にゴッホの墓の形を模した墓をつくり、自身の墓碑銘を書く。</b> これが最後の帰郷となる。 71歳の誕生日に鎌倉市にあるアトリエを美術館として開設。 個展と講演のため4度目の渡米。旅行中に健康を害し、サンフランシスコ、ホノルルで休養しながら帰国。 12月、「志昂」を再び「志功」に戻す。
1975年	昭和50年	72歳	日展常任理事となる。 9月13日、肝臓癌のため自宅で死去。同日付で従三位を追贈される。 青森市三内にある三内霊園に納骨され、青森市民会館において市民葬が行われる。 11月17日、青森市に棟方志功記念館が開館(令和6年3月31日閉館)

# 棟方志功について学ぶ 学習指導案

題材名 作品をみて話し合おう① 鑑賞 対象 小学校3・4年生

ねらい

棟方志功《二菩薩釈迦十大弟子》の鑑賞を通して、造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げる。

活動1 青森市出身の世界的版画家「棟方志功」という人がいることを知る。

- (1) 青森市名誉市民第1号である棟方志功の写真を見せ、「この人を知っていますか?」と聞く。
- (2) 「棟方志功」は、青森市出身の世界的な版画家であることを知らせる。
- (3) 「世界のムナカタ」として知られるきっかけとなった、作品をみる。

活動2 《二菩薩釈迦十大弟子》をみて、気づいたことや感じたことをワークシートに記入する。



にぼさつしゃかじゅうだいでし  
二菩薩釈迦十大弟子 1939/1948改刻(1967摺) 木版・紙 各101.5×38.0cm 棟方志功記念館蔵

- (4) ワークシートを配付し、作品をじっくりみて、気づいたことや感じたことを記入させる。  
※アレンジ: 十大弟子のポーズに注目して作品をみて、気づいたことや感じたことを記入する。
- (5) 原寸大に拡大コピーした掛図や、1人1台端末に入れた画像を閲覧できるようにし、全体だけでなく、細部までみるよう指示する。

活動3 グループごとに、それぞれが気づいたことや感じたことを話し合う。

- (6) 各自で記入したワークシートを基にして、グループ(4~5人)ごとに気づいたことや感じたことを紹介し合う。  
※アレンジ: 十大弟子のポーズのまねをして、登場人物の気持ちやセリフ、状況などを想像し、グループで伝え合う。
- (7) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。  
多様な見方や感じ方を受容し、個々の創造がさらに広がるよう促す。

活動4 身近な美術作品に目を向け、そのよさや面白さを感じ、想像を広げて楽しむ意欲をもつ。

- (8) 美術館など、美術作品を鑑賞できる場所があることを知らせる。
- (9) 棟方志功の作品づくりに対する姿勢について考えさせ、自分の表現に生かすことや、美しいものに素直に感動する心を育てるきっかけとしたい。
- (10) 今日の学習の感想をGoogleフォームのアンケートから送信させる。

# 棟方志功について学ぶ 学習指導案

題材名	作品をみて話し合おう② 鑑賞	対象	小学校5・6年生
-----	----------------	----	----------

ねらい

棟方志功《花矢の柵》の鑑賞を通して、造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。

**活動1** 青森市出身の世界的版画家「棟方志功」について知っていることを発表する。

- (1) 棟方志功の写真を見せ、「この人を知っていますか?」と聞く。
- (2) 「棟方志功」は、青森市出身の世界的な版画家であることを確認する。

**活動2** 《花矢の柵》をみて、気づいたことや感じたことをワークシートに記入する。



はなや さく  
花矢の柵 1961 木版・紙 215.0×688.0cm 棟方志功記念館蔵

- (3) ワークシートを配付し、作品をじっくりみて、気づいたことや感じたことを記入させる。  
(※付箋に書かせて、貼ってもよい)

※アレンジ: 人物のポーズや持っている物に注目して作品をみて、気づいたことや感じたことを記入する。

- (4) 拡大コピーした掛図や、1人1台端末に入れた画像を閲覧できるようにし、全体だけでなく、細部までみるよう指示する。

※アレンジ: 青森県立美術館蔵の《花矢の柵》(彩色)と見比べて、印象の違いについて話し合う。

**活動3** グループごとに、それぞれが気づいたことや感じたことを話し合う。

- (5) 各自で記入した付箋を基にして、グループ(4~5人)ごとに気づいたことや感じたことを紹介し合う。

※アレンジ: 登場人物の気持ちやセリフ、状況などを想像し、グループで伝え合う。

- (6) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。

多様な見方や感じ方を受容し、個々の創造がさらに広がるよう促す。

**活動4** 作品に、自分なりのタイトルをつけるとしたら、どんなものになるか考える。

- (7) タイトルと、その理由を考え、発表させる。

- (8) 振り返りとして、棟方志功が作品づくりに対してどのような姿勢で取り組んでいたと思うか問いかける。

- (9) 今日の学習の感想をGoogleフォームのアンケートから送信させる。

# 棟方志功について学ぶ 学習指導案

題材名

裏彩色を体験しよう

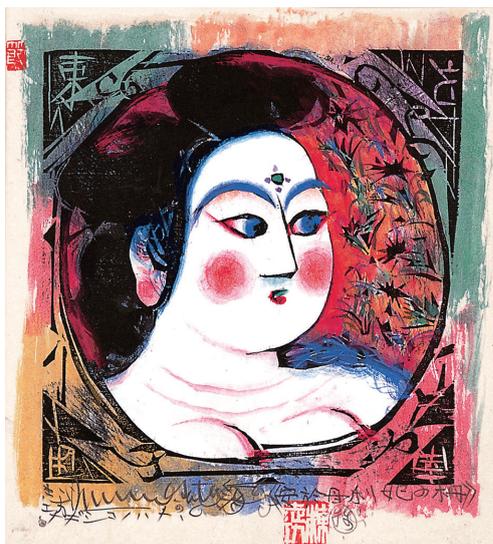
対象

小学校3年生以上

ねらい

裏彩色を体験し、作品の変化を感じたり、友達の作品のよさを味わったりすることを通して、自分の見方や感じ方を広げる(深める)ことができる。

活動1 棟方志功《門世の柵》の墨摺と彩色の作品を見比べる。



左：  
もんせい さく  
門世の柵  
1968 木版・紙  
34.3×29.0cm  
棟方志功記念館蔵

右：  
もんせい さく あおもりひ さく  
門世の柵(安於母利妃の柵)  
1968 木版、彩色・紙  
34.3×29.0cm  
棟方志功記念館蔵

- (1) 墨摺の白黒作品と、裏彩色の作品を見比べ、気づいたことや感じたことを発表させる。
- (2) 裏彩色は、棟方志功がよく用いた技法であることを知らせる。

活動2 志功さんになって、裏彩色(うらざいしき)を体験しよう。

- (3) 刷られた版画の紙とワークシートを配付し、手順を確認する。
- ※アレンジ：版画の学習で製作された版画作品を使用してもよい。
- (4) どんな色彩で彩色するかイメージするよう指示する。
  - (5) 時々、表面を確かめながら、彩色させる。

活動3 お互いの作品を鑑賞し、気づいたことや感じたことを話し合う。

- (6) 各自で彩色した作品を基にして、グループ(4~5人)ごとに自分が工夫したことや感じたことなどを紹介し合う。
- (7) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。  
多様な見方や感じ方を受容し、個々の創造がさらに広がるよう促す。

活動4 志功さんの作品づくりに対する姿勢について考えよう。

- (8) 振り返りとして、棟方志功が作品づくりに対してどのような姿勢で取り組んでいたと思うか問いかける。その後、作品作りに対する姿勢が伝わるエピソードを紹介する。
- (9) 今日の学習の感想をGoogleフォームのアンケートから送信させる。

# 棟方志功について学ぶ 学習指導案

題材名	裏彩色による表現	対象	中学生
-----	----------	----	-----

ねらい

裏彩色の表現技法を試すことで、版画の特性、構図や色彩、線、彫りや摺りの特徴に着目し、棟方志功作品の作風や作品の印象などを捉え、自分の見方や感じ方を広げる(深める)ことができる。

## 活動1 棟方志功《恐山の柵》の墨摺と彩色の作品を見比べる。



おそれざん さく  
恐山の柵 1963 木版・紙 70.2×91.0cm 棟方志功記念館蔵



おそれざん さく  
恐山の柵 1963(1964摺) 木版・彩色・紙 70.2×91.0cm 棟方志功記念館蔵

- (1) 墨摺の白黒作品と、裏彩色の作品を見比べ、気づいたことや感じたことを発表させる。
- (2) 裏彩色は、棟方志功がよく用いた技法であることを知らせる。

## 活動2 葉書サイズの木版画を制作し、裏彩色を体験しよう。

- (3) 棟方志功の表現を参考に、細かい線や太い線のコントラストを意識させたり、形や色彩に着目させて考えさせたりするなど、小学校で体験した木版画を基に、構想をするように投げかける。
- (4) どんな色彩で彩色するかイメージし、テーマを基にしたアイデアを自由な発想で考えさせる。
- (5) 葉書サイズの木版画を摺り、作品の裏側から彩色させる。

## 活動3 お互いの作品を鑑賞し、気づいたことや感じたことを話し合う。

- (6) 各自の作品を基にして、グループ(4~5人)ごとに表現意図や感じたことなどを紹介し合う。
- (7) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。多様な見方や感じ方を受容し、個々の創造がさらに広がるよう促す。

## 活動4 再び棟方志功作品を鑑賞し、感じたことや発見したことについて共有する。

- (8) 作品の見た目よさや美しさだけではない、作品制作上考えられる発見や、作者の思いなどに注目できるよう投げかける。
- (9) 今日の学習の感想をGoogleフォームのアンケートから送信させる。

# 棟方志功について学ぶ 学習指導案

題材名	生き方を知る わだばゴッホになる	対象	中学生
-----	------------------	----	-----

ねらい

『魅力発見！青森学「わだばゴッホになる 棟方志功」』を読み、棟方志功の生き方や作品づくりに対する姿勢について知ること、志功作品の作風や作品の印象などを捉え、自分の見方や感じ方を広げる(深める)ことができる。

活動1

『魅力発見！青森学「わだばゴッホになる 棟方志功」』を読み、棟方志功の生き方や作品作りに対する姿勢について考える。(道徳科・総合的な学習の時間)

- (1) 棟方志功の写真を見せ、「この人を知っていますか?」と聞く。
- (2) 「棟方志功」は、青森市出身の世界的な版画家であることを確認する。
- (3) 『魅力発見！青森学』を読み、感じたこと、考えたことをまとめる。

活動2

帝展に4回連続落選してもあきらめなかったことや、父が亡くなっても帰郷しなかったエピソードについて、志功の心情などを考え、話し合う。

- (4) 棟方志功のエピソードについて、感じたこと、考えたことをグループ(4~5人)ごとに意見交換をする。

棟方志功が、芸術家として自分の道を進むことができたのはどうしてでしょう。  
志功の生き方を支えた思いについて考えましょう。

- (5) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。

※アレンジ：青森市発行まんが伝記  
『わだばゴッホになる私たちの棟方志功』を活用して、考えさせる。(まんがは、青森市HPから閲覧可能)



活動3

棟方志功の作品を鑑賞し、気づいたことや感じたことを話し合う。(美術科)

- (6) 棟方志功の作品について、グループ(4~5人)ごとに表現意図や感じたことなどを紹介し合う。

※アレンジ：棟方志功の作品については、帝展の受賞作や、サンパウロ・ビエンナーレに続きヴェネツィア・ビエンナーレで大賞に輝いた《二菩薩釈迦十大弟子》など、生徒の実態に合わせて選定したり、生徒の興味関心に基づいて調べさせたりしてもよい。

- (7) グループで話し合ったことを、学級全体でも共有し、交流する場面を設ける。多様な見方や感じ方を受容し、個々の思考がさらに広がるよう促す。
- (8) 作品の見た目のよさや美しさだけでなく、作者の思いなどに注目できるよう投げかける。
- (9) 振り返りとして、棟方志功が作品づくりに対してどのような姿勢で取り組んでいたと思うか問いかける。その後、作品作りに対する姿勢が伝わるエピソードを紹介する。
- (10) 今日の学習の感想をGoogleフォームのアンケートから送信させる。